

まち「前橋で

みませんか



文学館友の会の連続講座

11周年を迎える

前橋文学館

前橋文学館は、市制施行一〇〇周年を記念して、平成五年に開館。場所は広瀬川河畔にあります。「廣瀬川白く流れたり」と萩原朔太郎が『純情小曲集』の「郷土望景詩」の中で詠った場所であり、今年九月で開館十一

「水と緑と詩のまち前橋」。本市は近代口語詩を確立した萩原朔太郎が生まれ育った地として、広く知られています。朔太郎の偉業を今日に伝えるとともに、文化の発信拠点でもある前橋文学館。その事業内容やボランティアで文学館の事業を支えているグループの活動について、前橋文学館と「前橋文学館友の会」の会長さんに話をお聞きし、記事をまとめました（担当は市民編集委員・寺沢、三輪）。

問い合わせは広報広聴課 890 6642へ。

萩原朔太郎が

残したもの

朔太郎の詩には「暗い、屈折した」イメージを持つ人が多いのではないのでしょうか。また、故郷を憎悪した詩もあり、医師の息子として裕福に育ったことから、当時から広く一般に受け入れられていたわけではありませんが、生活感に乏しい「芸術至上主義の詩人」と誤解された時代が長く続きました。

さまざまに展開

文学館の事業

文学館における朔太郎の資料

収集は質・量ともに全国一。それに加え、郷土ゆかりの文学者の資料もたくさんあります。それらを誰もが分かりやすく興味を持てるよう、視覚的に工夫を凝らしながら、学芸員を中心に展示方法にも努力を重ねているようです。市内の小中学生と中学生は、それぞれ一回ずつ文学館を見学することになっています。「詩のまち前橋」を子どもたちのころから知ってもらいたいです。

しかし、朔太郎の詩は現代人の心をとらえて離さない魅力にあふれ、世界レベルで高く評価されています。それを裏付けるように、開館以来、文学館には県内外はもちろんのこと、外国からも朔太郎ファンが訪れていくそうです。

また、マンドリンをはじめ音楽にも造詣が深く、中学時代から撮っていた写真も当時の本市の風景や風俗を今日に伝える貴重な資料です。朔太郎の多彩な才能が、知らず知らずのうちにわたしたちへ大きな影響を与えているとも言えるのではないのでしょうか。

以上、さまざま事業のほかにも、文学館の主催ではありませんが、毎年夏に「若い芽のポエム」という全国の小中学生、高校生を対象にした詩のコンクールが行われ、贈呈式では全国から集まった若い詩人らが、自分の詩を披露する朗読会も開催。このように詩を通じて、文化の継承と情報発信を行っているのが文学館なのです。